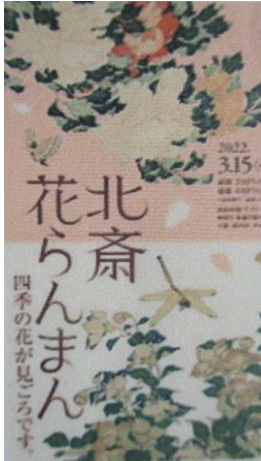


企画展 「北斎花らんまん」

すみだ北斎美術館（墨田区・亀沢）前期 22. 03. 15～04. 17 後期 04. 19～05. 22



世界的な画家として評価の高い「葛飾北斎」（宝暦10年1760～嘉永2年1849）は、本所割下水付近（現在の亀沢付近）で生まれ、およそ90年の生涯のほとんどを墨田区内で過ごしなが、優れた作品を数多く残した絵師として名高い。

墨田区は、郷土の偉大な芸術家の「北斎」を区民の誇りとして永く顕彰するとともに、地域の産業や観光へも寄与する地域活性化の拠点として「すみだ北斎美術館」を開設した。

本館では「北斎」及び門人の作品を紹介するほか、「北斎」と「すみだ」との関わりなどについてわかり易く伝えていく事業を展開して、「北斎」と「すみだ」の魅力を高めている。

葛飾北斎 《牡丹に蝶》 大判錦絵 1830～31年頃



牡丹に蝶は付きもので、初夏の冷風が花や葉を揺らして蝶を翻弄する季節感を見事に表現した「大判10枚」からなる花鳥画シリーズの伝統的な寓意画一作である。

この揃物の特徴は、背景を地潰し（地色を一色で平坦に摺る方法）で表現しクローズアップした点で、大きな牡丹の花を大胆にした画面の構成となっている。

葛飾北斎 《富嶽三十六景 東海道品川御殿山ノ不二》 前期展示のみ



数ある花の中でも古くから人気のある“桜”は、とりわけ多くの絵の題材になっていて、浮世絵版画や肉筆画にも、花見の名所や人々が花見をする様子を描いた作品が数多く残されている。当時は、江戸を一望できる高台の「御殿山」は、花と梅が同時に楽しめるとあって、ことさら人気を博した場所であるとされている。

この画伯の「御殿山」を描いた作品は、色を転写せずに凹凸のみで表現する“空摺”の技法によって摺られ、枝一杯に咲く”桜“が目を引く作品で、敷物を広げて酒宴に興じる人々や、子供を背負って歩く人々など、当時の様々な花見の楽しみ方も見て取ることができる作品である。